

メコン-チャオプラヤ河流域における二次的自然環境の保全とワイズユース —現地研究機関との協力による淡水魚類分布実態調査と標本コレクション構築—

多紀 保彦、打木 研三、渋川 浩一、菰田 誠、*名執 芳博
(財)長尾自然環境財団

メコン河とチャオプラヤ河は、インドシナ半島を流れる2大主要河川であり、その流域はインドシナ半島の大部分を占める。同地域の生物の多様性は世界的に知られており、そこでは古くから川のもたらす豊かな自然に支えられて人々が暮らしてきた。一方、住民が身近な自然を水田や畑地など生活の糧を得る場に改変・維持してきた環境(二次的自然環境)には多くの野生生物が入りこみ、生息・生育の場として利用してきた。同流域の生物多様性に関しては、元来の豊さに加え、人々の生業や文化と自然環境が相互に作用し支えあってきたという側面も見過ごしてはならない。

そうしたメコン-チャオプラヤ河流域の自然環境は、昨今の急激な経済発展や大規模ダム開発、異常気象などにより、現在、大きな脅威にさらされている。関係各国には、二次的自然環境が主体となったこの地域の生物多様性を保全するとともに、そのワイズユースにより自然資源に依存した生活を人々が続けられるような取組が求められている。しかしながら、適切な取組を進めて行く際に重要な同地域の生物基礎情報は断片的であり、極めて不十分である。調査を進める上で必要となる参照用資料も乏しく、調査を遂行できる現地人材も不足している。

このような背景の下、(財)長尾自然環境財団では、2006年度から2010年度までの5カ年にわたり、インドシナ4カ国(タイ・ラオス・カンボジア・ベトナム)の現地研究者と共にメコン-チャオプラヤ河流域に生息する淡水魚類の分布実態調査事業を実施した。淡水魚類に焦点を当てたのは、同地域の淡水魚類が多様性に富むこと、身近な食料資源として生活に密着しており、人々の関心も高いことによる。本事業では、当財団研究員と現地研究者が共に野外で採集調査を行い、データを記録し、標本を作成・登録し、標本庫で保管する、という一連の作業を通じて、調査技術や知識の移転を行なった。調査結果のみならず、将来この種の調査の中核をなす現地人材の育成を図ることも重要な目的となっていたことが、本調査事業の大きな特色である。

本事業には、タイのメジョー大学、カセサート大学、ウボンラーチャターニー大学、ラオスのラオス国立大学、カンボジアの水産局内水面漁業開発研究所、ベトナムのカントー大学が参加した。事業の活動内容は以下の通りである：①同流域魚類に関する既存文献資料のレビュー；②調査に必要な知識や技術の習得を目指した研修会の定期的開催；③調査に必要な資器材や資料の各国参加機関への供与；④標本収蔵庫の整備；⑤フィールド調査の実施；⑥魚類標本の整理・管理システムの導入；⑦魚類の生鮮時画像データベースの作成；⑧情報の共有・交換や各国の交流促進のため各国関係者が一堂に会する年次集会の開催；⑨第一期事業の締めくくりとして成果を発表する公開シンポジウムの開催。

本調査事業では、4カ国合計で540種(当流域に生息する魚種のおよそ半数と推定)、235,000個体以上の魚類が採集され、その採集データが標本データベースに入力された。画像データベースには合計513種、約45,000カットの生鮮時画像が保存された。これら標本資料や画像は各国の関係機関で永久保管され、図鑑やフィールドガイド等教育や調査研究活動に役立つ参照用資料として活用される。資料や人材の充実化に伴い、今後は、現地の官学民が共同で同流域の生物多様性の保全及び自然資源のワイズユースの実現に向けた活動を展開していくことが期待される。